

初恋

2022年にNetflixで製作された「初恋」というドラマは、監督・脚本とも寒竹ゆりが行っている。寒竹監督は1982年4月16日に東京で生まれた。宇多田ヒカルと同年で、1998年に宇多田が15歳で「First Love」でデビューした時、大きな衝撃を受けた。このドラマは1999年に大ヒットしたこの「First Love」にインスパイアされて作られた。寒竹監督は2006年に日本大学芸術学部映画学科脚本コースを卒業した。学生時代に書いたオリジナル作品を岩井俊二監督に送り、彼のもとで勉強し始めた。2004年に脚本を担当した「ラッセ・ハルstromがうまく言えない」がラジオドラマとして放送され、脚本家デビューした。映画やドラマの監督・脚本だけでなく、ドキュメンタリーやアーティストの音楽動画、MVなども手がけている。

「初恋」は恋に落ちる二人についての物語で、過去と現在を行き来しながら特徴的な方法で語られる。主人公である野口也英は美しく頭がいい女の子だが、あまり自信がない。高校生の時、並木晴道という男の子に興味を持つ。二人は両想いとわかり、すぐに付き合い始める。ある日、也英は事故に巻き込まれ、記憶を無くしてしまう。そのため、二人は別れることになるが、責任感が強い晴道はいつか立派な男になって也英を幸せにすると決心する。そして、しばらく経ってから也英に会いに行くが、彼女の母親に、也英はすぐに結婚するからやめしてほしいと言われる。現在の時間軸では、年数が経っても初恋を忘れられない晴道が描かれている。晴道はタクシーに乗った時、別のタクシーを運転している也英を見かけ、様々な方法で也英を探すが見つからない。晴道はある時一人の少年と知り合うが、この少年は也英の息子であることが判明し、彼を通して也英に会うようになる。そして、過去の記憶をまだ持っていない也英と友達になり、二人は再び恋に落ちる。

「昔のことはちゃんと覚えてるんだって。けどここ何年前かどうしても思い出せない」

これは也英が事故にあった後、過去の旅のお土産を見ながら母親に言う言葉だ。このことから、也英が彼氏や高校、大学時代の友達との記憶を失っていることが分かる。この言葉は、視聴者の感情をかき立て、也英の状況に同情を感じさせるのにも役立つ。也英は記憶を失ったことで自分の一部を失うことになるが、それでも前に進み続けた。また、この言葉には也英が感じている苦痛や悔しい気持ちが表れており、今後の人生に大きく影響することを示している。この引用の意味は、書かれているとおりで、記憶を失ったという事実に対する也英の欲求不満を表現するのに役立つ。

「世界を救うことはできないけど、せめて半径90cmの大事な人たちのことくらいは守れる男でいたい」

これは晴道が妹である優雨の結婚式で挨拶している時に言う言葉だ。子供の頃、優雨が溺れている時、晴道は助けられず、優雨は耳が不自由になった。そして、大学生の時、也英と喧嘩して、仲直りするために電話をかけたが、電話中に也英は車にひかれて記憶を失って

しまった。晴道は、愛する二人が巻き込まれた事故はすべて自分のせいだと感じていた。この引用は、晴道が感じている罪悪感を示している。この罪悪感が、強くなりたい、頼れる人間になりたいと思うようになった理由でもある。また、この言葉は晴道が今日の男である理由についての自己反省だ。子供の頃、晴道はウルトラマンになろうと思った。全世界を救える男だ。でも、大切な人を守るには半径90センチで十分だと気づいた。

「逃げるな、前を向け、息を吸って前進しろ。傷ついたって みっともなくたって人生は飛び込まなくっちゃならない」

この引用は也英の同僚である占部旺太郎が也英に言う言葉だが、この同僚は二つの場面でこの言葉を言う。1つ目の場面は、也英がタクシーの運転する方法を学んでいて、事故に巻き込まれそうになった時だ。也英は自分の仕事の能力に自信が持てず、諦めたかった。言葉は、彼女が犯した誤ちにもかかわらず、自分自身を取り戻し、前進し続けることを奨励するために言われた。2つ目の場面は、太郎が也英に告白して、振られた時だ。也英は「好きな人がいたら、どこにいても誰と何をしててもその恋が変わらない」と思い、それで十分だと自分に言い聞かせた。しかし、也英は自分に嘘をついていた。彼女は晴道に恋をしていたのに、本当の気持ちを抑えたのだ。太郎は也英が自分に嘘をついていることに気づき、自分の気持ちのために戦うように励した。この場合、意味は、困難な状況から逃げてはいけないということだ。失敗するとしても、何もしないで後悔するより行動した方がいいと太郎は言う。